

世界の有力大学の国際化の動向 ⑤

オックスブリッジ

米国の有力大学と競争する英語圏の大学

船守美穂 東京大学 国際連携本部特任教授



今回は米国以外の有力大学の国際化を紹介したい。英語圏で最古の大学で11世紀に設立された英国のオックスフォード大学と、オックスフォードの町の人々との対立から逃れてきた教員によって800年ほど前に設立されたケンブリッジ大学である。オックスブリッジとは、両大学の総称だ。

オックスフォード大学は人文社会科学に強く、ケンブリッジ大学は自然科学に強いといわれるが、両大学とも、現在は文理にまたがり、多様な学問分野を擁している。いずれも学術面で最高水準の大学として知られており、オックスフォード大学はノーベル賞受賞者47名のほか、ブレア前首相を含む25名の英首相、クリントン元米大統領やシン印首相、ガンディー元印首相など25名以上の世界のリーダーを輩出している。無論、人文社会科学に伝統ある大学にふさわしく、アダム・スミスやトマス・ホプスなどの経済学者や哲学者、『幸福の王子』の著者オスカー・ワイルドや『ナルニア国物語』のC.S.ルイスなどの小説家等々の人材も輩出している。ケンブリッジ大学は理系に強いこともあり、ノーベル賞受賞者は81名と多い。しかし、ダーウィンやニュートン、ラザフォード、ホーキング博士などの理系の学者以外にも、クロムウェルやケインズなど、人文社会科学や政治の分野で傑出した人物を輩出している。

学術面では重点が異なり、また、後に紹介するように大学の運営や国際化の方針なども異なる両大学であるが、カレッジとユニバーシティの二重構造を有する運営形態は

両大学に共通で、世界に類を見ない、固有のものである。このカレッジ・システムがゆえに生じる国際化の方針や運営面の特色もある。

今回は、世界の有力大学のなかでも最も歴史が長く、固有の伝統を守るオックスブリッジ両大学が、「大学の国際化」という世界の大学の今日的課題にどのように対峙しているか紹介する。

カレッジの集合体である大学

ここで、オックスブリッジにおける「カレッジ」と「ユニバーシティ」の概念について触れておく。

オックスブリッジの最大の特徴は、「ユニバーシティ」が「カレッジ」と呼ばれる、ミニ大学ともいえる組織から構成されていることである。

「カレッジ」は通常、「学寮」と訳され、教員と学生が寝食を共にし、また、学部生がチュートリアルと呼ばれる少人数制の個別指導を受ける場である。オックスフォード大学は45、ケンブリッジ大学は31のカレッジやこれに類するホールより構成される。すべての教員および学生がいずれかのカレッジに帰属することとなっているが、教員および大学院生は近年、カレッジの外に住むことも多い。

この「カレッジ」に対して「ユニバーシティ」は、これらカレッジの集合体である「大学」全体を指し、全学の教育運

営および大学経営を担う。ユニバーシティは各大学に一つである。ユニバーシティのもとに、学問分野別の学科(department, faculty, schoolなど)が構成され、この学科ごとに、開講するコースやカリキュラム、シラバスが編成され、科目を担当する教員の配置、学生の履修登録と管理、講義の開講場所の調整などが行われる。コースやカリキュラムの編成、履修や開講場所等に関わる各種の手続きは、ユニバーシティの役割として実施される。教員および学生はカレッジに帰属しつつ、自身の関連する学問分野の学科に向き、教育研究活動を行う。

ユニークなのは、オックスブリッジの「カレッジ」が学問分野ごとに構成されているのではなく、多様な学問領域の教員と学生で構成されることである。学問分野ごとに編成されているのであれば、カレッジを、日本の「学部」の概念に寮の機能を付け加えただけのものとして捉えればよいのであるが、そうではなく、オックスブリッジの「カレッジ」は学際的な空間なのだ。つまり、教育研究活動を行う仲間とは異なるグループが寝食を共にし、団結しているのである。カレッジの持つこの学際性が、教員や学生の横の交流を促し、オックスブリッジの学術の創成や発展につながっているといわれる。

しかも、カレッジは学部入学生の入学試験を行う。入学要件もカレッジごとに決まり、寮費もカレッジごとに異なるのだ。財務基盤もユニバーシティと独立して有しており、まさに、ミニ大学といえる。オックスフォード大学で2007年にインタビューしたおり、その前年に初めて大学の総学生数を把握した、と聞いた。カレッジごとに入学者を決めるため、これを包括、あるいは取り纏める立場にあるユニバーシティ側では総学生数が把握できていなかったのだ。大学のホームページに「大学はカレッジの連邦体(federation)である」と記してあることの意味が、理解された瞬間であった。

千年近くの歴史の末に、国際室を設置

オックスフォード大学もケンブリッジ大学もいずれも、留学生が非常に多い大学である。留学生数が、前者は学部1117名、大学院3288名、後者は学部1135名、大学院2392名である(2006/07年度)。いずれの大学も、学部は1割近く、

大学院については4割前後が留学生なのだ。しかも、この数にはEUからの留学生は含まれていない。EUからの留学生を含めるとオックスフォード大学の大学院は6割以上が留学生である。留学生は、欧州などの近隣諸国、インドやアフリカ、オセアニアなどの旧植民地や英連邦の諸国、それから近年は中国からの留学生が多い。国際的な組織として大学が発展しており、留学生の歴史は長い。それが1000年近くの歴史を経て、はじめて、国際室を大学に設置した。

オックスフォード大学は1990年、ケンブリッジ大学は2006年に国際室を大学の本部に設置した。ケンブリッジ大学の国際室は、同大学とMITとの間の学生交流プログラムを運営するために2003年に設置された国際教育室が前身となっている。いずれも、世界的に進行する「大学の国際化」の高まりを受けて設置したという。主な機能は、1)留学生受入れに関わる奨学金プログラムの管理・運営や寄付金の獲得、奨学金の配分等の手続きに関わるカレッジ間の調整と、2)海外大学との連携に関わる企画・調整および対外的な窓口の2つである。いずれも国際担当副学長のもとに、2-3名の人員を配置している。

前述のように、カレッジの連邦体として理解される大学である。これまで留学生は、カレッジにおいて受け入れられ、奨学金を付与され、経済的に困窮すればカレッジの寮長などが資金集めに奔走するなど、カレッジの家族的な厚い庇護のもとにあった。この状況は昔も今も変わらないのだろうが、世界の大学が優秀な留学生の獲得に乗り出すこの時代に、30以上あるカレッジがそれぞれに異なる対応をし、それが大学本部で把握すらされていない、といことは問題だった。特に、奨学金の付与については、各カレッジの足並みが揃わず、奨学金の付与の決定まで半年以上かかるような状況であったため、その間に優秀な留学生が米国の大学に流れてしまうことが国際室設置の最大の理由となった。

なお、留学生に対して国内学生の3-4倍の授業料を課し、留学生を大学の収入源とみなしている、と悪口を叩かれることの多い英国の大学であるが、オックスブリッジについていうと、留学生は収入源とはみなせないそうである。授業料は確かに国内学生より高いのだが、オックスブリッジの教育の特色であるカレッジにおけるチュートリアルは、少人数で教育を行っており、学生を受け入れれば受

け入れるほど赤字がふくらむ。しかも、留学生は、英語力や経済的、精神的安定性を考えても、国内学生よりはるかに手がかかる。このため、オックスブリッジでは留学生を収入源としてではなく、大学の学術水準を維持・向上するため、と位置づけている。

国際活動を厳選するケンブリッジ大学

ところで、ケンブリッジ大学は現アン・リチャード学長の命に基づき、2006年5月に国際関係の報告書を2つまとめた。「国際学術関係」と「留学生のリクルート・選抜・支援」に関するレポートである。THESなどの世界大学ランキングで概ねベスト5に位置するケンブリッジ大学であるが、自らの優位性を誇示する戦略をとる米国の有力私立大学に対抗する必要から、ケンブリッジ大学の国際関係について検討したのだ。

米国の有力私立大学を意識してまとめた、というわりには、この報告書は見方によっては非常に高飛車な内容となっている。ケンブリッジ大学らしいのかもしれない。あるいは、この作業部会のメンバーが、時流に流されることを嫌う、見識の高さを誇る集団だったのかもしれない。いずれにしても、なかなかの内容である。

まず、ケンブリッジ大学の国際戦略は、“大学の国際的活動の規模や留学生数の拡大ではなく、むしろ、より選択的で質を追求すべきものである”としている(表1)。そして、この精神は、あらゆる国際活動の方針において貫かれている。

たとえば、大学間協定についていうと、ケンブリッジ大

表1 「国際学術関係」作業部会の考える、ケンブリッジ大学の国際戦略の方向性

- ・質の高い活動に限る。
- ・活動を集約・精選する。
- ・ケンブリッジ・アセスメント、ケンブリッジ大学出版と密接に連携する。
- ・名声を失墜させるおそれのある活動を避ける。
- ・国の機関や国際機関、英国および海外の政府とより体系的な協力関係を構築する。
- ・地域性を重視し、途上国に対するキャパシティ・ビルディングや国際協力などの無償(pro bono)の活動を展開する。
- ・国際関係のための本部事務組織を強化する。

学は5大学(MIT, 清華大学, 北京大学, 京都大学, 東京大学)と極めて限定された大学としか協定を結んでいないのだが、“協定の数を今後、増加させることに意味はあると想定される。ただし、協定は以下の基準を満たし、十分に精選されなければいけない。”としている。留学生の獲得については“地域的多様性を重視するのではなく、質の確保が最優先されるべき”としており、海外分校や海外における教育プログラムの提供についても“教育課程は基本的にキャンパス内における教育活動に留めるべき”としている。

欧州で進行しているエラスムス計画を初めとした各種学生交流プログラムについても、これを意義あるものと認めつつも、慎重な態度を示している。ケンブリッジ大学は3学期制であり、また、科目の履修に当たって単位制を敷いていない。このため、世界の多くの大学の教育システムと、互換性が低い。また、授業料以外にカレッジの寮費が発生し、さらにチュートリアルなど、カレッジの受入れキャパシティの制約を受ける。科目修了の確認方法も世界の大学と大きく異なる。期末試験が年に1回しかなく、さらに、この試験では、学習した内容ではなく、そこから発展した論考を求めるのだ。先駆的に実施されたMITとの学生交流プログラムでは、このため相当の混乱が生じた。学期期間中に随時実施される小テストを通じて学習内容を定期的に確認できる教育方法に馴染んだMITの学生が、ケンブリッジ大学の教育方法を理解できず戸惑っているうちに、学期末の試験で不合格になるといったことが起きたのだ。

極めつきは、海外からの大学への来訪者の取扱いに関する方針であろう。ケンブリッジ大学への来訪者が後を絶たず、大学の負担になっているため、来訪者を3ランクに分け、“来訪を断る場合もある。また、来訪を受け付ける場合でも、戦略的に重要な来訪者については特別のプログラムをアレンジする。そのほかの来訪者については標準的なプログラムを提供し、かつ、これらについては(最低限、直接経費分だけでも)有償とすることも検討する。”としているのだ。

このような内容の報告書がインターネット上で、世界の誰からも閲覧可能な形で公開されていることは、驚きではないか。

国際競争を意識したオックスフォード大学

オックスフォード大学は、ケンブリッジ大学のような排他的姿勢は見せていないが、国際化という観点ではほぼ同じ方針である。つまり、優秀な留学生を獲得するために、奨学金プログラムの拡大と手続きの簡素化を図ろうとしている。海外分校を設置したり、学生交流を積極的に推進したりする予定もない。大学間協定についてはガイドラインを策定し、オックスフォード大学にふさわしい大学に限定する予定である。なお、大学間協定はケンブリッジ大学同様、極めて限定した6大学(東京大学, 北京大学, 台湾国立大学, ソウル国立大学, オーストラリア国立大学, プリンストン大学)としか締結していない。

一方で、世界の有力大学との競争という意味では、オックスフォード大学は、ケンブリッジ大学以上に危機感を露わにする。大学を取り巻く環境が年々厳しさを増すなか、オックスフォード大学がこれまでと同様の優位性を保てないのではないかとといった不安が募り、同大学の学術戦略(academic strategy)である「コーポレート・プラン 2005-6~2009-10」を2005年に策定したのだ。このコーポレート・プランは、教育・研究・ガバナンス・人事・財務・施設などに及ぶ。

コーポレート・プランに具体的には記されていないが、このプラン策定作業と並行して、オックスフォード大学が自身の研究力を学問分野別に評価したことは特筆に値する。2004年にTHESから初めて発表された世界大学ランキングにおいて、オックスフォード大学は、ピア・レビューが3位と高いにもかかわらず、論文引用度の順位が低かった。このため、総合ランキング5位というオックスフォード大学の地位は過去の栄光に依存しているのではないかと、いう懸念が生じたのだ。調査したところ、論文引用度の低さは、相互引用を多くする米国大学との研究スタイルの差であることが判明し、安心することができた。

なお、学問分野別の研究力の評価では、それぞれの学問分野の学科から適切な評価方法に関する提案を求め、評価を実施した。たとえば、哲学の分野では、“Philosophical Gourmet”という同分野の世界大学ランキングを参照した。論文数と論文引用度を評価するといった、世界のランキングで多く見られる手法は用いていない。論文数で評価することが難しい、人文社会科学系に強いオックスフォード大学ならではの工夫だろう。

英語圏の大学であるがゆえの競争

オックスフォード大学とケンブリッジ大学、それぞれにスタイルは異なるものの、どちらも世界の大学との競争を意識し、戦略文書をまとめた。競争が特に意識されるのは、米国の有力私立大学との、優秀な留学生と研究者の争奪においてである。

英国大学協会(UUK)が2007年7月にまとめた「卓越した人材の争奪戦:アカデミアの国際市場」では、2005/06年度において、アカデミアの英国への流入が流出に比べて多いことを好ましいとする一方で、シニア・レベルの研究者については流出が多いことについて警告を鳴らした。オックスブリッジを訪問した際も、大学における給与水準が低く、かつ、教育負担が重いことから、米国の有力私立大学にヘッドハンティングされる研究者が多いことを懸念する声が聞かれた。前号で紹介したカリフォルニア大学バークレー校も、米国の有力私立大学がその巨大な財力を背景に優秀な人材を引き抜き、公立大学が骨抜きになっていると指摘した。

英語圏以外の先進国の大学では、優秀な留学生や著名な研究者を獲得したい、といった意思表示は聞かれても、研究者が流出してしまい困難な立場に立たされている、といった当惑の声はあまり聞かない。非英語圏の大学であるがゆえのハンディが一般には多く指摘されるが、その意味では、これら大学は英語圏でないがために保護されると見ることもできる。つまり、世界の大学の競争とは、英語圏の大学間の競争と見ることもできるのではないかと。

誰も止められない勢いの米国の有力私立大学が、世界の優れた大学に及ぼしている影響は大きい。オックスブリッジの両大学がその歴史と伝統、英語圏の大学であるという強みと高い見識力をもって、対抗していくことを強く望みたい。

(参考文献)

- ・University of Cambridge, “Reports of two Working Parties on international matters”, (2006.5.17)
(日本語版: <http://dir.u-tokyo.ac.jp/kaigai/files/D-7-Cambridge.pdf>)
- ・University of Oxford, “Corporate Plan 2005-6 to 2009-10”, (2005)
- ・UUK, “Talent wars: the international market for academic staff”, (2007.7)
(日本語版: <http://dir.u-tokyo.ac.jp/kaigai/files/d-uuk2.pdf>)